

In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University merge to Osaka Metropolitan University

Title	天正本『太平記』卷四「呉越戦事」の増補傾向：姑蘇城・姑蘇台と西施の記述を端緒として
Author	大坪, 亮介
Citation	文学史研究. 58 卷, p.1-20.
Issue Date	2018-03
ISSN	0389-9772
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学国語国文学研究室
Description	

Placed on: Osaka City University Repository

Osaka Metropolitan University

天正本『太平記』卷四「呉越戦事」の増補傾向

—— 姑蘇城・姑蘇台と西施の記述を端緒として ——

大坪 亮 介

はじめに

元弘元年（一一三二）、後醍醐天皇は二度目の鎌倉幕府打倒計画にも失敗し、隠岐に配流された。『太平記』^①によれば、後醍醐は配所へと向かう途中、宿の庭木に次の詩句が刻まれているのを発見した。

天莫^レ空^三勾踐^一

時非^レ無^三范蠡^一

周知のように、これは備前国の住人児嶋高德が刻んだものであった。後醍醐方に加勢することが叶わなかったため、せめて忠義の志だけでも告げ報せようとしたのである。後醍醐は即座にこの詩に込められた真意を読み解く。すなわち、会稽の戦いに敗れながらも捲土重来を果たした越王勾踐を後醍醐自身に見立て、その勾踐を支えた范蠡のような忠臣の存在を知って心強く思ったというのである。『太平記』にちりばめられている数多くの挿話のなかでも、この高德の話は特に人口に膾炙したものと見えよう。このあと『太平記』は、高德の詩句に導かれるかたちで呉越の戦いを語っていく。

『太平記』卷四「呉越戦事」は、その呉越合戦の顛末を語る章段で

ある。卷四は本文異同が著しいことで知られているが^②、この章段も例外ではない。特に『太平記』諸本の中でも特異な本文を有する天正本には、独自に増補された箇所が目立つ。後述するように、天正本における当該箇所の増補については、独自に付加された詩句に注目した研究が既に存在する^③。本稿ではその成果も参照しつつ、「呉越戦事」全体にわたる増補傾向に着眼し、その特質と基盤について検討を加えていくことにしたい。

一 「呉越戦事」の概要

まずは、卷四「呉越戦事」の概略を示す。

- 1、越王勾踐が范蠡の諫めを聞かず呉に侵攻する。
- 2、戦いに敗れた勾踐は太子とともに自害を決意するが、大夫種の諫めを聞き入れ思いとどまる。大夫種は呉の太宰嚭に勾踐の助命を乞う。呉王夫差は勾踐を助け、呉の姑蘇城の牢に幽閉する。
- 3、范蠡は魚商に身をやつて姑蘇城に潜入し、魚の腹に文書を詰め込んで勾踐の牢に投げ込む。

1 天正本『太平記』卷四「呉越戦事」の増補傾向

- 4、夫差の病を癒やすため、勾踐は夫差の石淋を舐める。夫差は勾踐の行動に感激し、伍子胥の諫言を無視して勾踐を越に帰す。
 - 5、勾踐は帰国の途中で見た蝦蟇を越復活の予兆と喜ぶ。勾踐は寵妃西施との再会を果たすが、范蠡の諫めに従い、夫差の求めに応じて西施を泣く泣く呉へ遣わした。
 - 6、夫差は西施との淫楽に溺れ、呉の政治は乱れた。見かねた伍子胥は夫差を諫めるが、逆に怒りを買って処刑される。伍子胥の言葉通り、その両眼は呉の東門に懸けられた。
 - 7、呉の混乱を衝いて范蠡は呉に侵攻、遂に夫差を破り西施を取り返した。
 - 8、夫差は勾踐に助命を求める。勾踐は夫差に同情するが、范蠡の諫めに従い捕縛することにした。
 - 9、捕虜となった夫差は、呉の東門に懸けられた伍子胥の眼を見ることができなかつた。夫差は会稽山で処刑された。
 - 10、范蠡は五湖に隠遁し、悠々自適の生活を送つた。
- 右の構成要素は『太平記』諸本に共通する。さらに本稿で考察対象とする天正本では、以下のような比較的長文の独自増補箇所が存在する。なお、各箇所の上に付した数字は、右掲の呉越合戦記事の概略に付したものに対応している。
- 2、勾踐が囚人として呉へ赴く際、王子に死後の供養と越の復興を託す。
 - 3、范蠡が勾踐の囚われている獄舎に潜入し、互いに思いを伝えようとするが叶わない。
 - 5、帰国を許された勾踐が、自分と入れ替わりに呉へ赴く西施との

別れを惜しむ。その場面では「晩唐の詩」が引用される。6、夫差が西施の為に姑蘇台を築き、そこで歓楽をともにしたことを詳細に描く。

- 6、夫差を諫めた伍子胥のような過去の諫臣の例を挙げる。
- 7、歴代呉王の覇業に言及し、滅亡寸前となった夫差の奮戦を描く。
- 8、悠々自適の隠遁生活を送る范蠡の様子を詳述する。
- 8、勾踐が一度は幽囚生活を送つたものの最終的には夫差を倒したことを、隠岐に囚われた後醍醐の境遇に擬える。

天正本はこれらの増補によつて、独自の呉越合戦の世界を作り上げているといえよう。さらに天正本の本文を子細に検討していくと、右に挙げた長文の増補以外にも、章段全体にわたつて、ある一定の傾向を持った記述が増補されていることに気づく。それは、天正本は他本に比べて姑蘇城・姑蘇台に関する記述を特に多く含んでいるということである。そこでこの点について、章を改めて検討していきたい。

二 姑蘇城・姑蘇台に関する記述

姑蘇城は現在の中国江蘇省蘇州に位置していた。その姑蘇城の西南姑蘇山上に夫差が築いたのが姑蘇台である。呉越の興亡を語る上で欠かせない場所といえよう。当然のことながら、「呉越戦事」でも姑蘇城・姑蘇台への言及がある。例えば、巻四において古態をとどめる伝本とされる米沢本^①では、姑蘇城・姑蘇台は以下の四つの場面に現れる。まずは、会稽の戦いに敗れた勾踐が身柄を移される箇所を挙げよう。

剩へ勾踐ヲ典極ノ官ニ下サレテ、日ニ行事一馭駢レテ、呉ノ姑蘊城へ入給。其有様ヲ見人ノ泪カ、ラス袖ハナシ。日ヲ経テ姑蘊城ニ著給ケレバ、則柵械ヲ入テ土籠ニゾ入奉ケル。

この場面では、囚われの身となった勾踐が呉の都姑蘇城へ護送されたと語られている。

次にこの直後、范蠡が主君勾踐に伝言を届けようとする箇所を見てみよう。

去程ニ、范蠡越国ニ有テ此事ヲ聞ニ、恨骨髓ニ徹シテ忍ガタシ。哀何ニモシテ越王ノ命ヲ助リテ本国へ返給ヘカシ、諸共ニ謀ヲ廻シテ会稽ノ恥ヲ雪ント、肺肝ヲ碎テ思ケレバ、身ヲヤツシ形ヲ替テ、簣ニ魚ヲ入、自是ヲ荷、魚ヲ売商人ノマネヲシテ呉国ヘゾ行タリケル。姑蘊城ノ辺ニヤスライテ勾踐ノヲハシケル処ヲ問ケレバ、或人委ク教ヘ知セニケリ。

范蠡は魚商に身をやつして呉に潜入し、主君が囚われている姑蘇城の近辺を徘徊していたという。

三例目は、夫差が西施を手に入れたことで政治を疎かにしていた場面である。

或時又呉王、西施ニ宴セン爲ニ群臣ヲ召シテ南庭ノ花ニ酔ヲ勸メ給ケル処ニ、伍子胥威儀ヲ正クシテ參ケルガ、玉ヲ敷、金ヲ鏤タル瑤階ヲ上ルトテ、其裙ヲ高ク褰タル事、恰モ水ヲ涉時ノ如。人恠テ其故ヲ問ニ、伍子胥答テ申ケルハ、「此姑蘊台越王ニ亡サレテ、草深ク露繁キ地トナラン事不遠。臣若其迄命アラバ、仕ヘコシ昔ノ跡トテ尋見時、袖ヨリ余ル荆棘ノ露毛漉々トシテ深カラズラント、行末ノ秋ヲ思故ニ、身ヲ習ハシテ裙ヲバ掲也」トゾ

申ケル。

夫差は西施とともに「南庭」で遊宴に耽っていた。そこに伍子胥が現れ、裳を高く掲げながら階を登ってきた。これは姑蘇台がこのさき勾踐に滅ぼされて荒廃した時に備えるためだという。怒った夫差は伍子胥を処刑する。ここでは、夫差が西施との欲楽に耽った場として姑蘇台が登場している。さらにこの伍子胥の諫言からは、姑蘇台がいわば呉の滅亡を暗示する存在として描かれていることが読み取れるであろう。

最後に、范蠡が遂に呉へと侵攻し、西施を取り返す場面を挙げる。

范蠡先西施ヲ取返シテ越王ノ宮へ返入奉リ、姑蘊台ヲ焼払。此姑蘇台ト申ハ、四方千五百里ヲ直下テ、高事三百里ノ外ヨリ見ユル程ナレバ、兵火天ヲ焦シテ、余烟千山ヲ掠メタリ。齊・楚ノ両国モ越王ニ志ヲ通ゼシカバ、三十万騎ヲ出シテ范蠡ニ力ヲ合ス。

范蠡はまず西施を勾踐の宮殿へと送り、姑蘇台を焼き払った。周辺諸国も越に協力し、その軍勢は三十万騎にも及んだという。伍子胥の予言通り、姑蘇台は廃墟となってしまったわけである。

以上、米沢本において姑蘇城・姑蘇台が描かれる箇所を概観してきた。全体を通して四つの場面でしか現れない。しかも、伍子胥の諫言の箇所を除けば、「呉越戦事」全体にわたって姑蘇城・姑蘇台に何か象徴的な意味が込められているわけではなさそうである。この傾向は、天正本の系統を除く諸本にもあてはまる⁵⁾。

三 天正本の独自増補

天正本では、姑蘇城・姑蘇台への言及は十二箇所にも及ぶ^⑥。ここでは特に天正本の傾向が顕著に窺える以下の三つの場面を挙げる。

まずは、他本では別の表現になっている箇所が、天正本では姑蘇台と改められている例である。伍子胥が夫差の放蕩を諫める場面を示す。

或時、呉王又為^レ宴^二西施^一、群臣ヲ召テ、姑蘇台ノ花ニ戯テ、酔テ勸メ給ケル処、伍子胥冠弁正シテ朝シケルガ、サシモ布^レ玉鏤^レ金タル瑤階ニシテ登トテ、其ノ裙ヲ高ク挑タル事、宛力水ヲ渡ル時ノ如シ。

夫差は西施とともに姑蘇台で遊宴に耽つていたという。ここで「姑蘇台」となっている箇所が、米沢本などの他本では「南庭」となっている。もつとも、この直後の伍子胥の諫言では、「此姑蘇台越王ニ亡サレテ、草深ク露繁キ地トナラン事不^レ遠」（米沢本）とある。そのため、天正本以外の本文であつても、夫差が姑蘇台で宴を開いていることは読み取れるようになっている。これに対して天正本では、夫差と西施が歓楽に耽る場所として、姑蘇台の存在を特に印象づけようとしているといえよう。

次に、夫差が西施を呉に迎え入れる場面を挙げる。

凡彼西施ト申ハ、古今第一ノ美妓ナリケリ。粧成テ一^レ笑バ、百ノ媚、迷君ノ眼、今白地ニ后宮ヲ出給ヘバ、漸ニ疑^二地上無^一花。閉艷カト纒ニ視、千態蕩^二人心^一コトヲ。只御遊ニ君ヲワシマサネバ、忽ニ怪^二雲間ニ失^一月カト。越王宮中ニシテ、角クアクガレサセ給ヒケレ共、遂ニ姑蘇城ニ趣給フ。一度入^二宮中^一、侍^二君

王傍ヨリ、呉王懸テ御心空ニウカレテ、万^レツ思モ不^レ定カ。夜ハ通霄御楼ニ双^レ枕テ、互ニ相見シコトノ遅コトヲノミ歎テ、不^レ聞^二世政^一。尽日ニ鳳閣ニ宴ヲノミ事トシテ、不^レ勝^二国ノ危ヲモ^一。懸リケル程ニ、姪楽ノ余ニ、金殿雲ヲ挿デ、四辺三百里ガ山川ヲ枕^レ下ニ見程ナル、一ノ楼台ヲ造給ヘリ。此ヲ姑蘇台トゾ名付クル。雲ノ薨、霞軒、天ニ聳ウ。此楼上ハ九重也。其ノ重々ニライテハ、西施ト戯^レ給フベキ玉ノ床ヲゾ構タリケル。玉座ヲ敷キ錦帳ヲ垂ル、珠簾合^レ露秋風吹バ、玉燦爛タリ。呉王、西施ト共ニ此姑蘇台上ニ宴シ給ヘバ、天楽音雲ノ上ニ響キ、歌舞紫霄ノ外ニ湧ケリ。深更ニ紫霧ヲ燒バ、薰風半天ヨリ来ル。或ル時ハ閣ニ興シ給エバ、半窓ノ内ニ雲ヲ分ケ、一軒間二月ヲ携フ。乘^レ興登臨、触^レ時眺望、喩テ云ワン方ゾナキ。輦路ニ花無キ春ノ日ハ、麝臍ヲ埋テ履ヲ薫ワシ、行宮二月無キ夏ノ夜ハ、螢ヲ聚テ燭ニ代フ。如此姪楽日ヲ重テ、更ニ無^レ休時シカバ、上荒下廢ルレ共、佞臣ハ阿アテ不^レ諫、呉王ハ醉如シ忘。

西施は「古今第一ノ美妓」であつた。その西施を手に入れた夫差は淫楽に溺れ、次第に政治を疎かにしていったという。特に傍線部では、夫差が西施を寵愛するあまりに豪華な姑蘇台を築いたと語っている。このように、天正本は姑蘇台造宮の理由を明示しており、さらに波線部のように、文飾を凝らして姑蘇台の豪華さを描き出しているわけである。

一方、米沢本ではこの箇所は以下のような本文となっている。

彼ノ西施ト申ハ、天下第一ノ美人也。粧ナリテ一度笑バ、百ノ媚君ガ眼ヲ迷シテ、漸ク地上ニ花無カト疑フ。艷ヲ閤テ纒ニ見レバ、

千々ノ容人ノ心ヲ蕩シテ、忽ニ雲間二月ヲ失カト恠ル。サレバ、一度宮中ヘ入テ君王ノ傍ニ侍シヨリ、呉王ノ御心アケガレテ、夜ハ通宵嬉楽ヲノミ耆、世ノ政ヲモ聞ズ。昼ハ終日ニ遊宴ヲノミ事トシテ、国ノ危ヲモ顧ズ。金殿雲ニ挿テ四辺三百里ガ間ノ山川ヲ枕ノ下ニ直下セシモ、西施ト宴セン夢中ノ興ヲ催サン為也。鞞路ニ花ナキ春ノ日ハ麝臍ヲ埋テ履ヲ薫ジ、行宮二月ナキ夏ノ夜ハ螢火ヲ聚テ燭トス。嬉乱日ヲ重テ更ニ止時ナカリシカバ、上荒下廢ルレドモ、佞臣ハ阿ネツテ不諫。呉王ハ酔テ忘タルガ如シ。

米沢本でも西施が「天下第一ノ美人」であり、夫差がその美貌に夢中になってしまったことが語られている。しかし、天正本とは違って姑蘇台に関する詳細な描写はなく、姑蘇台が西施のために築かれたことも記されないのである。

天正本の傾向が窺える最後の例として、范蠡が呉に侵攻し、姑蘇台が灰燼に帰した箇所を挙げる。既に米沢本の本文を示した箇所ではあるが、ここでも天正本は、姑蘇台を描く際に独自の記述を付け加えている。

范蠡時ヲ得テ、越王ト共ニ二十八万騎勢ヲ率シテ呉国ヲ打平ゲ、姑蘇城ニ攻入テ宮闕ヲ破リ、呉王与西施 欲娛シ給ヘル姑蘇台、其ノ国宝共ヲ取ニケリ。剩三千ノ宮女共ト姑蘇城ノ外ニ徘徊シ給ヘル西施ヲモ奪取奉テ、越国ニ奉還リ、斉ノ国・楚ノ国モ越王ニ志ヲ通シカバ、三十万騎ヲ出シテ、范蠡ガ兵ニ合ス。

傍線部では、姑蘇台が夫差と西施の歓楽の場であったという、米沢本等には見られない記述が付加されているのである。

『太平記』巻四における呉越合戦の挿話は、諸本おしなべて西施中

心の構成をとることが知られている⁷⁾。その中でも天正本は、姑蘇城・姑蘇台を多く登場させ、なおかつ夫差と西施の歓楽に結び付けて語る傾向が看取される。とりわけ、夫差が西施に耽溺したため姑蘇台が造営されたと明示している点は、他本との大きな違いとして注目されよう。

四 『太平記』の記述に近い漢籍における

姑蘇城・姑蘇台と西施

前章で指摘した天正本の増補傾向は、呉越合戦を描く他の文献においても広く認められるのであろうか。そのことを確かめるため、まずは『太平記』の記述に近い漢籍における姑蘇城・姑蘇台と西施の描かれ方を検討していきたい。

『太平記』巻四で語られる呉越合戦の物語の典拠については、既に増田欣氏による詳細な論考がある⁸⁾。それによれば、当該箇所は、『史記』に大筋としては依拠しつつも、『呉越春秋』や『伍子胥変文』などとも近似する箇所があるという。本稿に関わるものとしては、西施についての記述の有無が論じられている。すなわち、『太平記』では、勾踐が一度呉の軍門に降った際、寵妃西施を夫差のもとに遣わしたことになっている。しかし、西施は『史記』や『伍子胥変文』にはそもそも登場しない⁹⁾。

一方、『呉越春秋』¹⁰⁾には西施が登場する。巻九「勾踐陰謀外伝」、勾踐が呉での虜囚生活を終え、呉に反撃するため九つの策謀を廻らす箇所である。

十二年越王謂大夫種曰、孤聞吳王淫而好色、惑乱沉湎、不領政事。因_レ此而謀、可乎。種曰、可_レ破。夫吳王淫而好色、宰嚭佞以曳_レ心。往_レ獻_二美女_一、其必受_レ之。惟王選_二挾美女二人_一而進_レ之。越王曰、善。乃使_二相者國中_一、得_二苾蘿山鬻薪之女_一。曰_二西施・鄭旦_一。飾以_二羅縠_一、教以_二容步_一、習_二於土城_一、臨_二於都巷_一、三年學服而獻_二於吳_一。

越王十二年、勾踐は大夫種の進言を聞き入れ、夫差の好色ぶりにつけて呉を混乱させる計画を実行した。まずは西施と鄭旦という二人の美女を得て、この二人を三年かけて教育し、呉王に献じたという。その後、夫差は伍子胥の諫めを聞かず二人の美女を受け入れることになる。

一読して明らかかなように、「呉越春秋」では、西施は勾踐の後ではなく、単に越の美女であったとされるに過ぎない。しかも、勾踐は呉を弱体化させるために進んで西施を夫差に献じたのであり、夫差の所望に応じて泣く泣く西施を送り出したわけではない。天正本も含めた『太平記』諸本とは大きく異なっているといえよう。

続いて、姑蘇城・姑蘇台の描かれ方を見ていこう。卷九「勾踐陰謀外伝」には、夫差が姑蘇台を造営した経緯について、以下のように記されている。

種（筆者注、勾踐の臣大夫種のこと）曰、呉王好_レ起_二宮室_一、用_レ工不_レ輟。王選_二名山神材_一、奉而獻_レ之。越王乃使_二木工三千余人入_レ山伐_レ木。（中略）乃使_二大夫種_一、獻_レ之於呉王。曰、東海役臣臣孤勾踐、使_二臣種_一敢因_レ下。吏聞_レ於左右、頼_二大王之力_一、竊_レ為_二小殿_一有_二余材_一。謹再拜獻_レ之。呉王大悦。子胥諫曰、王勿_レ受

也。昔者築_レ起_二靈台_一、紆_レ起_二鹿台_一。陰陽不_レ和、寒暑不_レ時、五穀不_レ熟、天与_レ其災。民虚国空、遂取_レ滅亡。大王受_レ之、必為_二越王_一所戮。呉王不_レ聽。遂受_レ而起_二姑蘇之台_一。三年聚_レ材、五年乃成。高見_二二百里_一。行路之人道死巷哭。不_レ絶_二嗟嘻之声_一。民疲_レ士苦、人不_レ聊生。

勾踐は大夫種の勧めに従い、夫差に木材を献上する。建築好きの夫差は伍子胥の諫めを聞き入れず姑蘇台を築いた。姑蘇台は二百里先からも姿が見えるほどの大規模な建築で、その造営によって呉の民は大いに疲弊してしまったという。このように、「呉越春秋」では、夫差が姑蘇台を築いたのは自身が建築を好んだためとされている。姑蘇台造営の理由についても、天正本はもとより他の『太平記』諸本とも明らかな隔たりが見て取れよう。

以上、『太平記』の記述に近い漢籍について検討してきた。これらの文献では、姑蘇城・姑蘇台をことさら西施と結びつけようとする傾向は窺えない。さらに姑蘇台が築かれた理由についても、天正本のような理解は示されていない。それでは、天正本の増補傾向は、日本における姑蘇城・姑蘇台についての言説に由来しているのだろうか。

五 日本の文献における姑蘇城・姑蘇台と西施

増田欣氏が指摘する通り、「わが国における呉越説話のくわしい叙述は、『太平記』にはじまる」という。まずは『太平記』以外で呉越合戦の歴史を語る文献から確認していくことにしよう。

最初に挙げるのは、仮名本『曾我物語』巻五「呉越のた、かひの

事」である¹²。「会稽の恥をきよむ」という表現の由来を語る箇所、呉越合戦の挿話が引用されている。日本古典文学大系頭注が指摘するように、本文は全体的に『太平記』に近い。前掲米沢本と同様、姑蘇台・姑蘇城は四箇所しか登場しないので、『太平記』のなかでも天正本以外の諸本に近接しているといえよう。ただし、仮名本『曾我物語』では、西施との遊宴に耽る夫差を伍子胥が諫める箇所のみ、天正本と共通する要素が認められる。

有時、吳王、西施に宴せんとて、群臣をあつめ、姑蘇台にして、花に酔をす、めけるが、さしも玉をしき、金を大うする瑤階をのぼるとて、裙をたかくか、げて、ふかき水をわたる時のごとくにせり。

伍子胥が裳を高く掲げて姑蘇台の階を登るこの場面では、傍線部「姑蘇台」とある箇所が、天正本以外の『太平記』では「南庭」となっていた。この箇所だけは天正本に類似するものの、仮名本『曾我物語』は姑蘇城・姑蘇台と西施との関係には触れず、姑蘇台が西施のために造営されたとも記していない。

次に、『三国伝記』巻六第十一話「呉越戦事」¹³を確認すると、本話でも姑蘇城・姑蘇台は四箇所しか登場しない。しかも伍子胥が諫言する箇所は次のような本文になっている。

或時亦吳王西施ニ為宴、群臣ヲ召南殿ノ花ニ酔ヲ勧給ケル処ニ、伍子胥威儀ヲ正而参リタリケルガ……

『三国伝記』では、天正本以外の『太平記』諸本と同様、夫差が遊宴を行っていた場所を「姑蘇台」とはせず、姑蘇城・姑蘇台と西施との関わりも示されない。

これらの呉越合戦の物語は、いずれも『太平記』に近い本文を持つ。しかし、天正本とは違い、姑蘇城・姑蘇台にことさら言及し、西施との関係を強調することはない。姑蘇台が西施のために造営されたとの記述も見られないのである¹⁴。このように、『太平記』以外の呉越合戦を語る作品を見渡してみると、天正本のような傾向はかなり特異であることが浮き彫りとなる。

続いて、西施や姑蘇城・姑蘇台について個別に記す文献を確認していくと、例えば、平安末の古辞書『色葉字類抄』¹⁵には、

西施（美女部） セイシ（美女名）

との記述が見られる。また、鎌倉期の類書『明文抄』には、西施に關する名句が四例掲載されており¹⁶、同じく鎌倉期に成立した金句集『玉函秘抄』にも、西施の美貌について記した『文選』の一節が引かれている¹⁷。さらに中世の説話集や軍記物語などを繕けば、西施の美貌にまつわる表現は枚挙に遑がない¹⁸。日本でも西施の名は古くから絶世の美女の代名詞として浸透していたことが窺える¹⁹。しかし、これらは特に西施と姑蘇台との関わりに触れることはない。

一方で、姑蘇城・姑蘇台については、右に挙げた古辞書や類書・名句集の類にもその名を見出すことはできず、西施に比べると取り上げられることは少ないようである。しかも、姑蘇城や姑蘇台に関する表現の多くは、次章に挙げる『和漢朗詠集』所引「河原院賦」の影響を受けたものである。そして、それらも姑蘇城・姑蘇台と西施との関係や、姑蘇台造営の理由について特に触れることはないのである。

六 『和漢朗詠集』注釈と『胡曾詠史詩』注釈

源順の「河原院賦」は、その題の通り源融の邸宅であった河原院を描く。この賦は次の一節が『和漢朗詠集』巻下「故宮付破宅」²⁰に収録され、広く人口に膾炙することとなった。

強呉滅兮有_レ荊棘 姑蘇台之露瀼々

暴秦衰兮無_レ虎狼 咸陽宮之煙片々

呉が滅亡した後の荒廃ぶりと露に濡れた姑蘇台の様子、そして秦の衰亡と咸陽宮の焼亡が描かれている。この詩句は様々な文献に利用された。一例として、ここでは『太平記』巻十四「伯耆守自勢多帰都事」を挙げよう。後醍醐に背いた尊氏軍が京都を攻め落とす場面である。

猛火内裏ニカ、リシカバ、前殿・後宮・諸司・八省・三十六殿・

十二ノ門・大厦ノ構へ、徒ラニ灰燼ト成シ有様ハ、只是越王呉ヲ

亡シテ、姑蘇台一片ノ煙ト成リ、項羽傾ケ_三秦ノ咸陽宮ヲ、三

月ノ火ヲ昌ニセシ、呉越・秦楚ノ古ハモ、是ニハ不_レ過ト覚ツ、

ウツ、ノ夢ニ迷テハ、此ノ世ノ中トモ不_レ覚シテ、泪ヲ淋リ也。

傍線部のように、尊氏軍の攻撃によって灰燼に帰した内裏の様子が、『河原院賦』に基づいた表現で描かれている。このように、姑蘇城・姑蘇台は都城の荒廃や火災の比喻として多く用いられた²¹。

とはいえ、「河原院賦」や、これを踏まえた右のような記述には西施は登場しない。中世さかんに制作された『和漢朗詠集』注釈にも、姑蘇城・姑蘇台と西施との関わりは窺いがたいのである。その中にあって唯一、平安後期に無明により編纂された『和漢朗詠註抄』「雑部」には、「河原院賦」の注として、次のような興味深い記述が存在

する²²。

……姑蘇台者、呉王夫差所_レ居宮也。呉王為_レ越王被_レ誅事、雲詩、陶朱辭_レ越之暮所在_レ之。可_レ見_レ彼所。史記云、呉王夫差攻_レ越。々敗乃進_三西施_一、請_レ退_レ軍帰_レ越。呉王許_レ之。既得_三西施_一、王甚寵_レ之謂、築_三姑蘇台_一。竭_三国内珠玉_一、以崇_レ飾_レ之。初王用_三子胥_一而霸_レ天下。後得_三西施_一、多遊_三姑蘇台_一宴樂、少見_三子胥_一。々々謂_レ諫曰、臣恐_三姑蘇台不_レ久為_レ麋鹿之遊所_一。王不_レ聽、遂殺_三子胥_一。……

最初に姑蘇台が夫差の宮殿であることが記される。傍線部では「史記云」として、越王が呉に敗れて西施を夫差に遣わしたことが、夫差が西施に耽溺して姑蘇台を築き欲楽を尽くしたこと、そしてこれを諫めた伍子胥が殺されてしまったことが語られている。先に見たように、『史記』には西施は登場せず、右のような記述も存在しない。出典表記に疑問はあるが、『和漢朗詠註抄』では、西施と姑蘇台との関係が明確に示されているのである。しかも、天正本と同様、姑蘇台が西施への寵愛ゆえ造営されたという点が特に注目されよう。これまで見てきた文献の中では、『和漢朗詠註抄』の説が天正本に最も近いと考えられる²³。

『太平記』巻四で語られる呉越合戦の挿話が、『和漢朗詠集』諸注釈等のいわゆる「中世史記」と密接な関連を持つことは既に知られている²⁴。また、天正本巻二十九の独自章段「八重山蒲生野合戦事」には、『和漢朗詠集和談鈔』の説と近似する記述も見られる²⁵。これらを踏まえれば、本稿で問題とする天正本の増補が、『和漢朗詠註抄』より影響を受けている可能性も考えられよう。しかし、残念なことに、

『和漢朗詠註抄』は伝本が少ない上²⁶、その後代への影響も定かではない。天正本と『和漢朗詠註抄』との関係も不明なのである。

こうした状況で注目されるのが、『和漢朗詠註抄』成立以前の中国の文献に、右の引用とほぼ同文の記述が存在することである。それが晩唐の詩人胡曾の『胡曾詠史詩』の注釈である。胡曾の生前に陳蓋によって著された旧注を挙げよう²⁷。

姑蘇台

吳王恃_レ霸棄_レ雄才_一

貪_下向_レ姑蘇醉_中醪醕_上

不_レ覺錢塘江上月 一宵西送_レ越兵來

史記云、吳王夫差取_レ越。々敗乃進_レ西施、請_レ退_レ軍。越_吳王許_レ之、既得_レ西施。王甚寵_レ之謂、築_レ姑蘇台。国内珠玉以崇_レ飾_レ之。初王用_レ子胥而霸_レ天下。後得_レ西施、多遊_レ姑蘇台。宴樂、少見_レ子胥。子胥謂_レ謀曰、臣恐_レ姑蘇不_レ久為麋鹿之遊。王不_レ聽_レ子胥、遂賜_レ子胥死。

『胡曾詠史詩』の「姑蘇台」という詩に、「史記云」として注が付されている。傍線部が先引した『和漢朗詠註抄』とほぼ同文であることは一目瞭然であろう。その上「既得_レ西施。王甚寵_レ之謂、築_レ姑蘇台」とあるように、姑蘇台が西施のために建設されたという説も記している。

『胡曾詠史詩』の注釈には、この旧注のほか、宋代の胡元質による新注もある。しかし、新注の説は次のように旧注とは大きく異なる²⁸。

國語吳語、吳王夫差欲_レ伐_レ齊。伍子胥諫曰、越_之在_レ吳、猶_レ人_之有_レ腹心之疾。齊猶_レ疥癬也。今王高_レ々下_レ々。以罷_レ民於姑蘇。

越必襲_レ我。王弗_レ聽。伍子胥曰、具不_レ忍_レ見_レ王之親為_レ越擒也。請_レ先死。將_レ死曰、懸_レ吾目於東市門。以見_レ越之入_レ吳也。注曰、姑蘇台名。在_レ吳近_レ湖。其後越兵伐_レ吳圍_レ姑蘇台。吳王曰、凡吾土地人民越既有_レ之矣。孤何以示_レ於天下。吾何面目以見_レ員也。遂自殺。前漢伍被伝曰、昔子胥諫_レ吳王。々々不用。乃曰、臣今見_レ麋鹿遊_レ姑蘇之台。

新注では『國語』の説として、夫差を諫めた伍子胥がかえって死を賜ったという逸話を引く。『國語』にこうした記述は存在しないが、右の引用箇所、伍子胥は姑蘇台が人民の煩いとなっていることを指摘し、吳王の敗北を予見している。さらに「注曰」以下では、姑蘇台の立地や、越兵に姑蘇台を包囲された時の夫差の言葉が記される。そして最後に「伍被伝曰」として、伍子胥が姑蘇台の廃絶を予見した言葉が引用されている。新注では伍子胥を中心にした逸話が複数語られるものの、西施について言及されることはなく、姑蘇台の造管理理由についても明記されない。

新注は南北朝期に日本に伝来していたことが確実である。『胡曾詠史詩』の日本における注釈で、『太平記』とも関わりの深い『胡曾詠抄』にも新注の説が多く採用されている²⁹。しかし、新旧二種類の注釈を比較してみると、天正本の増補により近い内容を持つのは旧注の方なのである。

旧注自体の日本への伝来は定かではなく³⁰、天正本との関わりも『和漢朗詠註抄』と同様に明らかではない。『胡曾詠史詩』旧注と天正本との関わりを全く否定することはできないものの、両者の関係を裏付ける決め手には乏しい。

ところが、中国の文献にさらに目を向けてみると、天正本成立の下限（長享二年（一四八八）～三年（一四八九））³¹までに日本に将来された文献のうち、『和漢朗詠註抄』や『胡曾詠史詩』旧注と同様の記述を持つものは、実は他にも複数存在する。しかも、次章で詳述するように、それらが日本で享受された環境は、先行研究が指摘する天正本の増補環境と重なり合っているのである。

七 禅林で享受された文献との関わり

『四庫全書』を検索すると、『胡曾詠史詩』旧注などに近い記述を有する文献は十一点に及ぶ³²。そのうち、天正本成立以前に日本に伝来したことが確実なものは以下に絞られる。まずは南宋の祝穆の編纂により、淳祐六年（一二四六）に前集が成立した類書『新編事文類聚』続集³³の例から見ていこう。巻八「居所部」に「築姑蘇台」という項目が設けられている。

吳王夫差、破_レ越。々敗乃進_二西施_一、請_レ退_二軍_一。吳王許_レ之。吳王既得_二西施_一。甚寵_レ之為築_二姑蘇台_一。高三百丈。遊_二宴其上_一。伍子胥諫曰、臣恐_二姑蘇台不久為_二麋鹿之遊_一。吳王不_レ聽。

この引用から分かるように、『新編事文類聚』の姑蘇台の説明は、明らかに『胡曾詠史詩』旧注や『和漢朗詠註抄』と同文関係にある。姑蘇台が西施のために築かれたという、天正本の増補と同様の説も書き漏らしてはいない。

続いて、同じ祝穆の手になる南宋の地理書『方輿勝覽』巻二「姑蘇山」³⁴にも次のような説明がある。

史記、吳破_レ越。越進_二西施_一、請_レ退_二軍_一。吳王許_レ之。王得_二西施_一、多遊_二姑蘇_一。子胥諫曰、臣恐_二姑蘇不久為_二麋鹿之遊_一。王不_レ聽。『方輿勝覽』も『胡曾詠史詩』旧注などと同文関係にあり、最初に「史記」と典拠を記すところも共通する。ただし、『方輿勝覽』は姑蘇台が築かれた理由を明記してはいない。

最後に、右と同様の例として元初の大徳十一年（一二三〇七）に成立した韻書『韻府群玉』巻三「姑蘇台」³⁵を挙げる。

吳王夫差破_レ越。々進_二西施_一、請_レ退_二軍_一。吳王得_二西施_一、築_二一_一。高三百丈。遊_二宴其上_一。子胥曰、臣恐_二不久為_二麋鹿之遊_一。王不_レ聽。

ここでも夫差が姑蘇台を築いた理由ははっきり記されない。しかし『方輿勝覽』も『韻府群玉』も、短い記述の中で夫差が西施を得たことに続けて姑蘇台に言及している。特に後者では、「吳王得_二西施_一、築_二一_一とあるため、姑蘇台が西施のために築かれたことはより容易に読み取れるようになっていく。この点よりすれば、右の二例も天正本と同様の理解を示す記述に含めて差し支えなからう。

『新編事文類聚続集』は類書、『方輿勝覽』は地理書、『韻府群玉』は韻書と、それぞれ種類の異なる文献である。しかし、興味深いことに、いずれも中世日本では主として禅僧の間で享受されていたという共通点を持っている。すなわち、『新編事文類聚』の受容例は、義堂周信の『空華日用工夫略集』永和二年（一二七六）三月十五日条³⁶に、

香林問_二韋臯事_一。余略答_レ之、又引_二事文類聚_一。

とあるのがきわだって古く、その後室町期を通じて、主として禅林において利用されたことが明らかにされている³⁷。

『方輿勝覽』については、住吉朋彦氏がその版本に関する論考の中で、「日本では、中世から近世初に掛け、五山禅僧の周辺で、本書の幅広く用いられたことが指摘される」とし、該書が鎌倉期に円爾によって将来された可能性に触れた上で、その享受の特徴として、「日本に於ける本書活用の様は、五山学藝の隆盛と相俟ち、室町時代になつてから前面に顕れた」こと、そして「唐土の地理考証と、詩文の鑑賞に資益した」ことを挙げている³⁸⁾。

最後の『韻府群玉』についても、住吉氏は、「日本における『韻府』受容の契機は五山禅僧の活動にあり（中略）、南北朝の中頃には本書の参考が広がっていたことを窺わせる」と述べ、「元明の建刊本と本邦南北朝刊本の潤沢な流通を基礎として本書の受容が広がっていき、主に五山禅僧の検閲に便宜を齎した」ことを挙げている³⁹⁾。

そして、こうした享受の様相から想起されるのが、天正本巻四「呉越戦事」で独自に付加された詩句に関する森田貴之氏の指摘である⁴⁰⁾。すなわち、天正本では、夫差の要求に従つて西施が呉へと旅立つ箇所、「晩唐の詩」として以下の七言絶句とその評語が増補されている。

美如^三西施離^二金闕^一

嬌似^三楊貴蟠^二玉楼^一

細雨濺^レ花千点淚

淡烟籠^レ竹一対愁

ト。西施ガ越王ノ宮ヲ離テ、姑蘇城ニ赴ク其ノ愁ヲ、後來ノ詩人筆端ニ賦シ尽ケルコト、苟ニ絶章トゾ覺タル。

西施の美貌と呉に赴く悲哀を描いたこの詩句は、従来出典不明とされ

てきた。しかし、森田氏が明らかにしたように、これは「晩唐の詩」などではなく、そもそも一首の漢詩で足りない。第一句と第二句、第三句と第四句は、それぞれ宋代に作られた別々の頌の一部であり、天正本は、それらの句を「句双紙」や「禅林句集」のような禅語集を用いて一種の漢詩に仕立て上げていると考えられる。そして、「天正本増補者は内容だけでなく、平仄や脚韻にまで気を配って漢詩を作成しており、漢詩文に対してある程度の知識は持っているうえ、禅的環境との関わりも深いことがわかる」と指摘されている。

このように、天正本では、西施に関わる箇所において、禅とのつながりを示す詩句が増補されているわけである。このことは、本稿で取り上げた天正本の増補傾向と禅僧の間で享受された文献との関わりを考える上で示唆に富む。

加えて見逃せないのは、西施や姑蘇城・姑蘇台が中世の禅僧、とりわけ詩を能くする僧たちの間でなじみのある存在だったことである。西施については、例えば禅林において愛読された蘇軾「西湖詩」（「飲湖上初晴後雨」二首のうち一首）に、西施に関わる左のような表現が見られる⁴¹⁾。

水光激灑晴方好

山色空濛雨亦奇

欲^下把^二西湖^一比^中西子^上

淡粧濃抹総相宜

西湖の風景は晴れでも雨でも美しい、この西湖を西施に喩えるならば、西施が薄化粧でも濃い化粧でも美しいようなものであるという。「西湖詩」は日本の禅僧の間でも広く親しまれた。その一因として、朝倉

尚氏は、西湖が西施に喩えられている点を挙げている。すなわち、西湖詩の比喩は「蘇軾の視点、観点を変えた発想に基づいており、価値の転換や一新を図る発想、禪的発想、禅味とも一脈相通するものがある。禅僧が佳句として評価し愛用する最大の因由は、この点に存する」という⁴²⁾。禅僧に愛読されたこの詩において、西施は重要な比喩として登場しているのである。

一方、姑蘇城や姑蘇台に関しては、禅僧が詠んだ詩のなかに姑蘇の地を取り上げた作品が見られることを挙げておきたい。五山文学を代表する絶海中津の『蕉堅稿』に収録された「姑蘇台」もその一例である⁴³⁾。

姑蘇台上北風吹

過客登臨日暮時

麋鹿群遊華麗景

江山千里版図移

忠臣甘受属鏤劍

諸將愁看姑蔑旗

回三首長洲古苑外

断烟疎樹共凄其

大意は次の通り。姑蘇台の上を北風が通り過ぎた。旅人（絶海）が姑蘇台に登って日暮れ時に眺めてみると鹿が遊んでおり、かつての華麗な面影はない。その後江山千里の国土は興廢を繰り返した。呉の忠臣伍子胥は属鏤劍で自害し、諸將は越の軍勢に姑蔑の旗を認めて憂いを抱いた。頭をめぐらして長洲古苑の外を見れば、煙は絶え樹木は疎らで、荒涼とした様子である。

以上の内容からも窺えるように、絶海は明に滞在中姑蘇を訪れていた⁴⁴⁾。絶海のように実際に姑蘇の地を踏み、呉越合戦を偲ぶ詩を詠んだ禅僧がいたことは注目に値しよう。

さらに、禅林でしばしば引かれる名句を類聚した「句双紙」にも、姑蘇台に言及した句が見出される⁴⁵⁾。

姑蘇台畔不語春秋

衲僧面前豈論玄妙

姑蘇台の辺では歴史を語らず、禅僧の面前では玄妙を論ずることがあるのか、という意味で、あまりに明白で語るには及ばないことの喩えである。この句は宋代成立の『嘉泰普灯録』卷三「東京慧林円照宗本禅師」を出典とする。「句双紙」編者との伝承がある東陽英朝の語録『少林無孔笛』にも同様の句は引用されており⁴⁶⁾、室町期には禅僧の間でよく知られていたと推測される。

以上からは、西施や姑蘇台が禅僧の間で親しまれた題材であったことが窺えよう。こうした関心のありようからすれば、「事文類聚」等に見られる姑蘇台と西施に関する説が、禅僧たちの目を引きつけたことは想像に難くない。

本稿では、天正本と同様の説のうち、わずかに『和漢朗詠註抄』や『胡曾詠史詩』旧注と同文関係にある記述を『四庫全書』の中から探索し得たに過ぎない。西施と姑蘇城・姑蘇台との関わりが窺え、なおかつ姑蘇台が西施のために築かれたとする中国の文献は、他にも存在していることも考えられよう。天正本がそうした書物を利用して可能性は排除できない。また、前述したように、『和漢朗詠集』注釈や、『胡曾詠史詩』旧注の影響を受けている可能性も完全には捨てきれ

ないであろう。

とはいえ、天正本と同様の説を簡潔に語る同文的記述が、天正本の成立圏で享受された文献に集中して存在するという事実は決して看過できない。右に見た西施・姑蘇台と禪僧との関わりや、天正本「呉越戦事」の増補主体が「漢詩文に対してある程度の知識があり、禪的環境との関わりも深い」という指摘も併せ考えるならば、本稿で問題とする天正本の独自増補が、『事文類聚』といった禪林で享受された文献から影響を受けている可能性はやはり高いのではあるまいか。

おわりに

本稿では、天正本巻四「呉越戦事」が姑蘇城・姑蘇台に特別な関心を寄せ、西施と結びつけて語っていることを端緒として、その傾向と天正本の増補環境にまで論を進めてきた。禪林で利用された文献との交渉を探ったという意味では、前章で参照した森田氏の論考の範疇を大きく越えるものではないかもしれない。しかしながら、禪林との関わりが一漢詩句だけでなく、「呉越戦事」全体にわたる増補傾向からも窺い得たことは、天正本独自の作品世界と成立圏との交渉を考える上で一つの手がかりになる可能性を秘めているよう。

加えて、本稿で注目した姑蘇城・姑蘇台に関しては、巻四「呉越戦事」だけでなく、巻二十六巻末「御即位事」にも注目すべき増補が確認できる。この章段では、北朝崇光天皇の即位式が以下のように語られているのである。

天子・王・卿、冕服ヲ着シ、諸衛・諸陣大儀ヲ服ス。四神幡ヲ墀

ニタテ、諸衛鼓ヲ陣ニ振フ。紅旗卷テレ風ニ画竜揚リ、玉ノ幡映ジテレ日ニ文鳳翔。秦ノ阿房宮ニモ不異、呉ノ姑蘇台モ角ヤト覺テ、末代ト云ナガラ、カ、ル大儀ヲ遂行ル、事、有難カリシ様ゾカシ。

天皇はじめ参列者が儀礼用の装束を身にまとい、中庭には四神の旗が立てられ、そこに衛府の官人の鼓が鳴り響く。紅の旗が翻るとそこに描かれた竜が昇っていくように見え、玉の旗は日を受けて鳳凰の模様が空を翔るようであったという。続く傍線部では、即位式の様子が、まるで秦の阿房宮や呉の姑蘇台のようであったと語られている。いずれも「滅びゆく宮殿」⁴⁷であり、この比喩は晴れがましい儀式には相応しくない。しかし、天正本が南朝を正統とする独自の歴史認識を示す⁴⁸ことを念頭に置いてみたとき、北朝の盛儀を阿房宮と姑蘇台に擬える天正本の意図は明白となろう。天正本独自の歴史観に関わる記述において、姑蘇台の存在が持ち出されている点は看過できない。本稿で焦点を置いた姑蘇城・姑蘇台への関心が、そうした歴史認識ともつながりを持つか否か、さらなる検討の余地が残されている⁴⁹。

また、筆者は以前、天正本巻二・巻三十八の増補箇所を分析し、後醍醐周辺の真言僧・真言寺院との関わりを想定したことがある⁵⁰。他にも天正本の増補には、近江佐々木氏の関与を窺わせる箇所なども存在する⁵¹。こうした指摘と本稿の指摘とが果たして関わりを持つのかという点についても、今後考察を進めていく必要があるだろう。

このように、該本の増補をめぐって検討すべき問題は多岐にわたるが、天正本の成立圏や独自の作品世界について考えるとき、姑蘇城・姑蘇台に関する言説に注目する意味は決して小さくないと考える。

〔注〕

(1) 『太平記』本文の引用は、特に注記がない限り天正本に拠る。文献の引用に当たっては、句読点を付し返り点を補うなど、私に表記を改めた点がある。

(2) 小秋元段『太平記』巻四古態本文考(『国語と国文学』第八十五卷第十一号、二〇〇八年十一月)。

(3) 森田貴之「天正本『太平記』増補方法小考―巻四「呉越戦の事」増補漢詩について」(『京都大学国文学論叢』第二十二号、二〇〇九年九月)。

(4) 注(2)小秋元氏論文参照。なお、米沢本の引用は市立米沢図書館デジタルライブラリーに拠る。

(5) 本稿で参照した『太平記』諸本は以下の通り。

西源院本系	西源院本(『西源院本太平記』クレス出版、二〇〇五年)
神宮徴古館本	(『神宮徴古館本太平記』和泉書院、一九九四年)
甲類	玄玖本系
	玄玖本(『玄玖本太平記』勉誠社、一九七三―七五年)
	南都本系
	梁田本(『国立国会図書館デジタルコレクション』)
	内閣文庫本(『国立公文書館デジタルアーカイブ』)
	米沢本(市立米沢図書館デジタルライブラリー)
	梵舜本(『古典文庫』)
乙類	天正本(『国文学研究資料館蔵紙焼写真』)
	教運本(『義輝本太平記』勉誠社、一九八一年)
丙類	龍谷大学本(『龍谷大学善本叢書太平記』思文閣出版、二〇〇七年)
	日置本(『中京大学図書館蔵太平記』新典社、一九九〇年)
丁類	京大本(『校訂京大本太平記』勉誠出版、二〇一一年)

(6) これ以外に天正本で姑蘇城・姑蘇台が登場する場面を示す。なお、1、2、6と番号を付した例は、米沢本等と共通する。

1、(呉に囚われた勾踐) 日々二行一駅、前後ノ兵二圍レテ、漸ニ呉王ノ姑蘇城へ入給フ。(中略) 日ヲ経テ姑蘇城ニ付給ケレバ、即扭ヲ入テ、土ノ楼ニゾ奉レ入ケル。

2、(囚われの勾踐のもとに范蠡が赴き) 姑蘇城ノ辺ニ徘徊シテ、越王ノ御坐所ヲ問ケレバ、帝都ノ父老教テケリ。

3、(范蠡、西施を惜しむ勾踐を説得して) 西施独リ姑蘇城ニ入給ハゞ、呉王必日夕ニ姪樂シテ、朝堂ノ礼不レ行、失三國政シコト、疑フ所ニ非ズ。(中略) 此時、呉王ノ姑蘇城へ打入テ宮闕ヲ亡シ、西施ヲ奪取シコト、掌ヲ指ガ如ナラン。

4、(呉へ赴く西施を詠む漢詩を挙げて) 西施ガ越王ノ宮ヲ離テ、姑蘇城ニ赴ク其ノ愁ヲ、後來ノ詩人筆端ニ賦シ尽ケルコト、苟ニ絶章トゾ覚タル。

5、(西施との別れに際して) 越王宮中ニシテ、角クアクガレサセ給ヒケレ共、遂ニ姑蘇城ニ趣給フ。

6、(伍子胥、淫楽に溺れる夫差を諫めて) 君王背三綱、妄ニ五常ヲ給ヌル故ニ、此雲霄ニ聳タル姑蘇台モ、幾ク程無クシテ、越王ニ被レ亡テ、草深く露滋キ地ト成シ事遠カラジ。

7、(夫差が最後の戦いに挑んで) 呉王自大敵ニ相当コト卅ニケ度也。半夜ニ晋・越・斉・楚ノ四面ノ兵ヲ破テ、六十七騎ヲ随テ姑蘇山ニ取登リ、越王ノ軍中ニ使者ヲ遣シテ云ク……

8、(越の再興を見届けてから) 范蠡去テ、カ、ル勝境ニ閉情ヲ楽シマシムル故ニ、洞庭ノ秋ノ月、一葉ノ船ニ棹サセバ、

波底ノ月ヲヤ穿ラム。烟寺ノ晚鐘打開バ、姑蘇城ノホトリニ
アラネ共、扁舟ニ鐘ヲバ送りケリ。

9、(後醍醐の境遇を勾踐に擬えて) 偏ニ是、越王勾踐、責呉テ
陷会稽之困後、姑蘇城ノ樓ノ内千般ノ苦ミヲ免テ、終ニ又
義兵ヲ起シテ、討呉王、洗会稽恥テ、併呉越ヲ、令
一統シニ同ジカルベシ。

7の例のように、単に姑蘇城・姑蘇台の名を挙げるだけの記述も
見られる。しかし、3の例において范蠡は、西施が姑蘇城に入れ
ば、夫差はその美貌に耽溺し政務を疎かにするであろうと進言し
ている。後者は、姑蘇城と西施との関係を明示しようとする例と
いえよう。いずれにせよ、天正本が全体として姑蘇城・姑蘇台を
多く登場させていることは右の一覧より明らかである。

(7) 程国典「(呉越説話)の形成―『太平記』への道のり―」(『国際
文化学部論集』第十三巻第一号、二〇一二年四月)。

(8) 増田欣「『史記』を源泉とする説話の考察」(『『太平記』の比較
文学的研究』角川書店、一九七六年(初出は一九五五年))。

(9) 『日本国語大辞典』第二版は「姑蘇台」という項目を立て、以下
の用例を挙げている。

史記・呉也家「呉王夫差破越(略)既得西施甚寵之、為
築姑蘇台」

しかし、実際には「史記」に「呉也家」という章や右の引用部分
は存在しない。『史記』の代表的な注釈書である『史記索隱』・
『史記正義』・『史記集解』にも、右のような記述は確認できない。

(10) 引用は、『重印四部叢刊』に拠る。

(11) 注(8)に同じ。

(12) 引用は、日本古典文学大系に拠る。

(13) 引用は、『中世の文学』に拠る。

(14) ほかに呉越合戦の物語が見られる作品としては、『唐鏡』第二や
流布本『平治物語』下「頼朝遠流に宥めらるる事付けたり呉越戦
ひの事」、源平盛衰記」巻十七「始皇燕丹・勾踐夫差」も挙げら
れる。しかし、いずれも合戦の概略を示すのみで西施も姑蘇城・
姑蘇台も登場しない。

(15) 引用は、中田祝夫・峰岸明編『色葉字類抄 研究並びに索引』
(風間書房、一九六四年)の前田本に拠る。

(16) 『明文抄』に引かれる西施に関する表現は以下の通り(引用は、
遠藤光正『明文抄の研究並びに語彙索引』(現代文化社、一九七
四年)に拠る)。

1、巻四「人事部下」

加脂粉則宿瘤進、蒙不潔則西施屏。(金楼子)

2、巻一「帝道部上」

西施自窺於井不恃其美、猶佐湯沐、堯舜自窺於井
不恃其美、猶須才德。(太平御覽)

3、巻三「人倫部」

西施之容婦増其貞者也。(文選)。

4、巻四「人事部下」

毛墻西施善毀者不能蔽其好。嫫媧倭傀善譽者不能掩
其醜。(文選)。

(17) 『玉函秘抄』に引かれる西施に関する表現は以下の通り(引用は、

遠藤光正「玉函秘抄語彙索引並びに校勘」(無窮会東洋文化研究所、一九七一年)に拠る。

毛嬙西施善毀者不能敵其好。嫫母倭傀善譽者不能掩其醜。(文選)。

(18) 『十訓抄』中巻第五「朋友を撰ぶべき事」(引用は、新編日本古典文学全集に拠る)では、妻選びの要諦が次のように説かれている。

まことに、その姿、西施、南威をうつせりとも、夫を軽しめ、外心あらんは、かへりてあたとなるべし。

美貌の持ち主であつても夫を蔑ろにする妻は選ぶべきではないことを、西施のたとえを用いて述べている。

また、『太平記』巻一「実兼公女后妃備事」では、後醍醐の後禰子について、

天桃ノ春ニ傷メル粧、垂柳ノ風ヲ含ル御形、毛嬙・西施モ面ヲ恥ヂ……

とあり、その美貌が毛嬙・西施に擬えられている。

(19) 当然のことながら、漢籍にも西施の美貌にまつわる表現は数多く見られる。例えば、『明文抄』や『玉函秘抄』に引用されているもの以外では、日本でも広く受容された「蒙求」にも「西施捧心」とある。応安頃刊五山版『蒙求』などの古注釈では、この句の由来として、美女の西施が病に苦しむ様子を、里の女性がこぞって真似したという逸話が語られている。

(20) 引用は、三木雅博訳注『和漢朗詠集 現代語訳付き』(角川ソフィア文庫、二〇一三年)に拠る。

(21) 例えば『平家物語』巻七「聖主臨幸」では、都落ちする平家が

旧都に放火した様子のように語られる(引用は、新日本古典文学大系に拠る)。

強呉忽ちにほろびて、姑蘇台の露、荆棘にうつり、暴秦すでに衰て、咸陽宮の煙睥睨をかくしけんもかくやおぼえて哀也。

源順の詩句を利用して、炎上する都が姑蘇台や咸陽宮に喩えられている。

また、真名本『曾我物語』巻四には、
其後二人少者共、知我身程、姑蘇台露茂……

とあり、幼い曾我兄弟が自分たちの境遇を思い知って涙に暮れる様子が、姑蘇台の露に喩えられている(引用は、『真名本 曾我物語』(勉誠社、一九七四年)に拠る)。これは火災や都城の興廢の比喩ではないが、源順の詩句をその淵源として考えると考えられよう。

(22) 引用は、伊藤正義・黒田彰・三木雅博編『和漢朗詠集古注釈集成 第一巻』(大学堂書林、一九九七年)に拠る。

(23) 『和漢朗詠抄』はその説の多くを『和漢朗詠私注』に依拠しているものの、当該箇所に関しては、『和漢朗詠私注』とは無関係である(山崎誠「和漢朗詠抄」攷」『中世学問史の基底と展開』和泉書院、一九九三年(初出は一九八二年))。

(24) 注(8) 増田氏論文、徐萍『太平記』の西施説話考―比較文学の視点から―(『東京大学国文学論集』第十号、二〇一五年三月)参照。徐氏によれば、西施が勾踐の妃であったとする『太平記』諸本の記述は、漢籍ではなく『広大本和漢朗詠集仮名注』な

どの説に基づいている可能性がある。さらに『太平記』の西施説話は、玄宗と陽貴妃の話や、二条帝と多子の物語からも影響を受けているという。

(25) 近江蒲生野の戦いで佐々木道誉らが布陣する箇所¹に次のような記述がある。

一方へハ五郎左衛門尉高秀ヲ大将トシテ、二百余騎ヲ指分テ、蒲生野・小椋ノ一族ドモヲ案内者ニテ、悪事ノ高丸ガ壊塚ヲ後ニ当テ陣ヲ張ル。

道誉の子高秀は、悪事高丸の壊塚近辺に陣を張った。傍線部のように、ここでは悪事高丸と壊塚との関係が示されている。新編日本文学全集頭注が指摘するように、実はこれと類似する説が『和漢朗詠集和談鈔』にも記されている（引用は、『和漢朗詠集古注釈集成 第三卷』に拠る。□内は欠損を補ったもの）。すなわち、「白」部の和歌の注釈に、

坂田田村丸、為退治悪事高丸、蒲生野ノ破塚ニ発向之時、当寺ニ祈願有テ得勝。彼帝釈ノ、修羅ニ勝テル准テ得勝堂、号善勝寺。

とあり、坂上田村麻呂が悪事高丸退治のため蒲生野の破塚に向かったとある。

(26) 現存する『和漢朗詠注抄』の伝本は、東北大学本・身延文庫本・黒木氏旧蔵本二帖のわずか四本で、いずれも鎌倉中期の書写にかかる（『和漢朗詠集古注釈集成 第一卷』「解題」）。本稿で検討した箇所は黒木氏旧蔵本に見られるものである。なお、山田尚子氏はこれらの伝本の特徴を分析し、『和漢朗詠注抄』は二段階

の編纂過程を経ていると指摘している（『和漢朗詠注抄』についての再検討』『説話文学研究』第四十四号、二〇〇九年七月）。

(27) 引用は、『四部叢刊統編』に拠る。

(28) 引用は、米沢文庫蔵米沢善本八十六「明本排字増広附音釈文三註」（市立米沢図書館デジタルライブラリー）に拠る。

(29) 黒田彰『伝承文学資料集成第三輯 胡曾詩抄』「解題」（三弥井書店、一九八八年）

(30) ただし、『胡曾詠史詩』新注や『胡曾詩抄』の伝本の中には、一部旧注説を併記するものも存在する。例えば、米沢文庫蔵のもの一つの²新注である米沢善本八十五「明本排字増広附音釈文三註」（市立米沢図書館デジタルライブラリー）「姑蘇台」の題下には、
国語呉王収越。々兵敗乃進西施、請退軍。呉得西施、甚寵之、為築一臺也。珠玉裝飾日同。宴樂於此也。

と、旧注の説がやや簡略なかたちで引かれている。黒田彰氏によれば、足利学校本内題下には「旧陳蓋注其糜胡元質又起明本云々」との記述があるといい、「室町期に少なくとも両注のあったことは、よく知られていた訳で、我が国における旧注の伝播について、明本排字本は是非注意されるべき位置にあると言えよう」と述べている（前掲『胡曾詩抄』「解題」）。ただし、「旧陳蓋注其糜」との文言よりすれば、旧注の説はあまり一般的ではなかったと思われる。

(31) 『胡曾詩抄』の伝本では、永正十年（二五一一）書写の神宮文庫本にも、題の直後に右と全く同じ旧注の説が引用されている。天正本より後出本文を持つ梵舜本に長享二年（三年の本奥書

が存在しており、天正本は「いかにおそくとも長享以前」（鈴木登美恵「古態の『太平記』の考察―皇位継承記事をめぐって―」『国文学 解釈と教材の研究』第三十六巻第二号（一九九一年二月））に成立していたことは確実である。さらに長坂成行氏は、「十五世紀初期には天正本は成立していたと考えたい」と述べ（『天正本太平記成立試論』『国語と国文学』第五十三巻第三号（一九七六年三月））、小秋元段氏も同様に、天正本の成立がかなり遡るとする。すなわち、南都本も天正本より後出であることを明らかにした上で、その南都本が「神明鏡」（室町初期成立、中期にかけて増補）に利用された可能性を指摘、「天正本系の成立時期は、従来の認識よりも早い段階に引き上げて考える必要がありそうだ」と論じている（『南都本『太平記』本文考』『太平記・梅松論の研究』汲古書院、二〇〇五年（初出は一九九八年））。

(32) 『四庫全書』の検索には、『文淵閣四庫全書電子版』（上海人民出版社、二〇〇〇年）を用い、日本への伝来状況については、嚴紹璽編著『日藏漢籍善本書録』（中華書局、二〇〇七年）を参照した。なお、天正本以降の成立、あるいは天正本成立以前の日本への伝来を確認出来ないもので、『和漢朗詠註抄』等と同文的な記述を持つ文献は以下の通り。

・宋代

虞載『古今合璧事類備要』別集十九「姑蘇」

・元代

詹道伝『孟子纂箋』（『四書纂箋』）卷八

郝天挺注『唐詩鼓吹』卷五

・明代（いずれも十六世紀以降）

張之象注『塩鉄論』卷六（『塩鉄論』自体は漢代）

彭大翼『山堂肆考』卷一七二「寵西施」

・清代

張玉書ら編『佩文韻府』卷七之八「姑蘇」、卷十之三「姑蘇台」

康熙帝勅撰『淵鑑類函』卷三四九

陳維崧撰・程師恭注『陳檢討四六』卷十四

『日藏漢籍善本書録』によれば、『古今合璧事類備要』は明代嘉靖年間（一五二二～一五六六）の版本が伝来している。『孟子纂箋』（『四書纂箋』）は確認できず、『唐詩鼓吹』は内閣文庫に明代初めの版本が伝存するものの、これは文化五年（一八〇八）に市橋長昭がその蔵書を湯島聖堂に献上したうちの一つであるという。

(33) 引用は、米沢文庫藏明代刊本（市立米沢図書館デジタルライブラリー）に拠る。

(34) 引用は、宮内庁書陵部藏南宋嘉熙二年（一二三八）刊本（国文学研究資料館デジタル画像）に拠る。

(35) 引用は、米沢文庫藏元代元統二年（一三三四）刊本（市立米沢図書館デジタルライブラリー）に拠る。なお、『韻府群玉』卷三には、本文中で引用した「姑蘇台」とは別に、「姑蘇」という項目が立てられている。

越進「西施於呉請退師。呉得之築一臺。遊宴其上」。

この項目は「姑蘇台」と小異はあるものの、越が西施を呉に送り、呉が姑蘇台を築いたという内容自体は共通している。

(36) 引用は、『統史籍集覽』に拠る。

(37) 芳賀幸四郎『中世禪林の学問および文学に関する研究』第二編

第三節(日本學術振興會、一九五六年)、住吉朋彦「室町時代に於ける『事文類聚』享受の位相」(『和漢比較文学』第十一号、一九九三年七月) 参照。

(38) 住吉朋彦『方輿勝覽』版本考(『斯道文庫論集』第四十九号、二〇一五年二月)。

(39) 住吉朋彦『韻府群玉』版本考(『中世日本漢学の基礎研究 韻類編』汲古書院、二〇一二年)。

(40) 注(3)に同じ。

(41) 引用は、国立国会図書館蔵明代刊本『東坡全集』(国立国会図書館デジタルコレクション)に拠る。

(42) 朝倉尚「蘇公堤と『西湖詩』」(『禪林の文学—中国文学受容の様相—』清文堂、一九八五年(初出は一九七七年))。

(43) 引用は、国立国会図書館蔵室町初期刊本(国立国会図書館デジタルコレクション)に拠る。詩の解釈については、玉村竹二『日本の禅語録八 五山詩僧』(講談社、一九七八年)を参照した。

(44) 称光天皇在位中(応永十九年(一四二二)～正長元年(一四二八))に成立した絶海の年譜『勝定国師年譜』には、

拜永安塔、訪和靖旧姑蘇台。

(45) 引用は、光岡文庫蔵貞享五年(一六八八)刊本(国文学研究資料館デジタル画像)に拠る。

(46) 卷之一「住尾張州青龍山瑞泉禅寺語」には、文明十六年(一四八四)六月に瑞泉寺に入った東陽の拠室として、

徳山棒臨濟喝、姑蘇台畔春秋

とある(引用は、芳澤勝弘編著『東陽英朝 少林無孔笛訳注 一』(思文閣出版、二〇一七年)に拠る)。

その東陽については、貞享五年刊『句双紙』跋文に次のような伝承が見える。

自「從古」此集者、花園開山関山国師七世孫東陽英朝禅師之所集也。

これによれば、『句双紙』は古くから東陽の編纂にかけると考えられていたという。

(47) 北村昌幸「皇位継承記事の配置」(『太平記世界の形象』塙書房、二〇一〇年(初出は二〇〇二年))。

(48) 注(31)鈴木氏論文、李章姫「天正本『太平記』卷二十六「大稲妻天狗未来記事」の視点」(『軍記と語り物』第五十二号、二〇一六年三月) 参照。

(49) この箇所において、阿房宮と姑蘇台の記述の直前にある「紅旗卷テ風ニ画竜揚リ、玉ノ幡映シテ日ニ文鳳翔」という表現は、『和漢朗詠集』下「帝王」に収録された藤原伊周の詩の一節「玉辰日臨文鳳見 紅旗風卷画龍揚」に依拠している。そのため、こゝは『和漢朗詠集』やその注釈との関係が強い可能性もある。ただし、阿房宮と姑蘇台を並列している点は『和漢朗詠集』とは異なる記述となっており、その他の文献との交渉も予想される。いずれにせよ、この箇所については本稿の指摘との関連も含め、さらなる検討を要する。

(50) 拙稿「天正本『太平記』の増補—真言関係記事を例に—」(関西

軍記物語研究会編『軍記物語の窓 第五集』和泉書院、二〇一七年）。

(51) 鈴木登美恵「佐々木道誉をめぐる『太平記』の本文異同―天正本の類の増補改訂の立場について―」（『軍記と語り物』第二号、一九六四年十二月）、注（31）長坂氏論文参照。

※本稿はJSPS科研費（若手研究（B）課題番号17K13388）による研究成果の一部である。

（おおつば りょうすけ）

大阪市立大学大学院文学研究科都市文化研究センター研究員